

# 三鷹市山本有三記念館館報

Yuzo Yamamoto Memorial Museum Report

第5号  
2011.10

三鷹市山本有三記念館企画展

## 三人の「女の一生」

—ジャンヌと允子とけい—

2011年10月1日（土）→2012年2月29日（水）

1932（昭和7）年、山本有三が長編小説4作目のテーマに選んだのは「女の一生」でした。フランス人作家・モーパッサンの同名小説（原題「Une Vie」1883年刊）を意識しつつ執筆された本作は、明治から昭和を舞台に、主人公御木允子が恋愛や結婚、出産、仕事を通して一人の人間として自立していく過程が描かれています。時代に先駆けて新しい生き方をした女性の物語は、朝日新聞に連載され大きな反響を呼びました。



山本有三著『女の一生』（中央公論社 1933年） 装幀：中村研一

山本有三著『女の一生』初版本  
中央公論社 1933年

「女の一生」を書き始める少し前、有三は明治大学に新設された文芸科の初代科長を引き受けました。有三は「文芸修行者のための一つの道場」という理想を掲げ、教授陣の選考と依嘱に奔走する一方で、1932（昭和7）年10月には「女の

こうして書き上げられた「女の一生」は、連載時に挿絵を担当した画家・中村研一の装幀により1933（昭和8）年11月に刊行されます。作者として連載中止の責任を感じていた有三でしたが、起訴猶予の身では沈黙せざるを得ず、まえがきもあとがきもないままの出版となりました。

有三はその後、初版本の印税を全て文芸科学生の育英資金として明大に寄付します。釈放されすぐ、明大の記念館地下食堂に文芸科の学生を集め、「留置中自分が一ぱん憂慮したのは文芸科のことだが、心配しなくてよい」と語ったというエピソードからも、有三が教育者という職責に真摯に向き合っていたことが分かります。自らも苦学した有三にとって、学びたいという強い意志を持った学生達の支えとなることは、ごく自然なことだったのではないでしょうか。

本展では有三が描いた允子の一生を、モーパッサンのジャンヌ、森本薰のけいと比較しながら読み解きます。激動の時代の中を、自分で選んで歩き出した道を力強く踏みしめ、生きた女性たちの姿をご覧ください。

「女の一生」の連載を開始するという多忙な毎日を送っていました。

しかし翌年6月、共産党に資金を提供した疑いで有三が検挙されるという事件が起こります。そのため、「女の一生」は第二部「母の愛」の第19節（刊本では第20節）まで筆が進んだところで連載中止となりました。一週間ほどで釈放された有三は、その後山中湖畔に避暑し「母の愛」の第20節以下と「第二の出産」を執筆します。有三と長く交流のあったドイツ文学者の高橋健二氏は「苦労して育った有三は、苦難に会うと、気力がわきあがるたちであった」（『山本有三全集第7巻』新潮社 1976年）と述べていますが、一旦途切れた創作の後を続けることがどれほど大変なものであったかは想像に難くありません。「女の一生」の作中、「出産」は重要なキーワードとなっていますが、その成立の過程では難産を経験したと言えるでしょう。

有三はその後、初版本の印税を全て文芸科学生の育英資金として明大に寄付します。釈放されすぐ、明大の記念館地下食堂に文芸科の学生を集め、「留置中自分が一ぱん憂慮したのは文芸科のことだが、心配しなくてよい」と語ったというエピソードからも、有三が教育者という職責に真摯に向き合っていたことが分かります。自らも苦学した有三にとって、学びたいという強い意志を持った学生達の支えとなることは、ごく自然なことだったのではないでしょうか。

# 『女の一生』をめぐる

## 言葉の差、時代の差

永田千奈

フランスの小説、モーパッサン（一八五〇—一九三）の『女の一生』は、一九一三年（大正二年）

に初めて日本語に翻訳された。翻訳者の名は、広津和郎（一八九一—一九六八）。早稲田大学英文学科出身の広津はトルストイやドストエフスキイなどロシア文学まで訳している。さては仏、独、英、三か国語もあやつる語学の達人と思いきや、彼は英語版をもとにして訳していたのである。当時は、このような「重訳」がごく普通に行われていたのだ。念のためにつけくわえておくと、広津の訳は、その後、丸山順太郎によって原著、すなわち仏語版との照合が行われ、手が加えられたことである。

さて、話をもどそう。なぜ、ここまで「英語版からの重訳」であることを強調したかといえば、

まさに英語版から訳されたからこそ、日本語の訳題は、『女の一生』になったからなのである。

一八八三年（明治一六年）、モーパッサンは初めての長編小説を書きあげた。これまで短編小説の名手とされてきた彼にとって、長編小説の執筆は大きな挑戦であったにちがいない。主人公のジャンヌは、男爵家に生まれ、修道院で少女時代を過ごす。そして、修道院から出てまもなく、眉目秀麗な子爵に見初められ、結婚する。だが、夫は浮気性のうえに吝嗇りんしょくであった。やがて、夫はその浮気相手の夫に殺害される。未亡人となつたジャンヌは息子を溺愛するが、その息子にも裏切られ、ついには屋敷を手放さざるを得なくなる。絶望の果て、生まれたばかりの孫娘をその胸に抱きしめるジャンヌに対し、長年彼女によりそつてきた乳

姉妹の女中、ロザリが語りかける。「ねえ、ジャンヌ様、人生ってのは、皆が思うほど良いものでも、悪いものでもないんですね」モーパッサンは平々凡々たる人物、英雄とは程遠い人物を描くことで、ごく普通の人間が抱える現実の重さ、そして、流されていく人間の弱さを描こうとしたのだ。夢想だけでは生きられない。それでもつい夢を抱き、他人に期待をかけ、裏切られる。愚かといえば愚かである。その愚かさを徹底的に描くのが自然主義文学の真骨頂であり、時代が変わってもこの作品が読み継がれている所以である。人間の愚かさ、それに対する憐憫れんびんは今も昔も同じなのだ。

この作品にモーパッサンは『Une vie』というタイトルを与えた。vieは、生涯、生活、生命といった意味をあわせもつ言葉で、英語のlifeに相当する。uneは、不定冠詞といわれる冠詞で、「ある不特定のひとつ」を指す。つまり、『Une vie』というタイトルに「女の」という意味合いはない。

直訳すれば『ある一生』もしくは『ある人生』という意味であり、男の一生だろうと、誰の一生だろうとフランス語では『Une vie』なのだ。

やがて、この小説が英語に翻訳される。英語の翻訳者は、このタイトルを『A woman's life』と訳した。『A life』では小説の題としてインパクトが弱いと判断したのか。それとも、生活、生命といった意味にとられることを恐れ、女性の一代記であることをタイトルで示そうとしたのか。いずれにしても、英語版のこのタイトルを和訳することによって、『女の一生』という題は誕生したのだ。もし、原題を直訳していたら、この小説は

『ある人生』というタイトルで日本に紹介されたのかもしれない。それにも、なぜ、『女の一生』だったのだろう。

主人公ジャンヌの生き方を考えれば、ある程度、答えが想像できる。手元の新明解国語辞典による「生涯は『その人が（社会人として）生きている間』、人生は『人間がこの世に生きていくことと、その生き方』」とある。貴族の娘に生まれて常に不自由なく育ち、社会性をもたず、人生哲学もなく、何かを成し遂げではない。ただ受け身のまま流されて生きるジャンヌに、「人生」や「生涯」という言葉は似あわない。それに、こうした女性像は何もフランスだけのことではない。日本においても、女性は長らく、誰かの娘、誰かの妻、誰かの母として生きることを強いられ、受け身で生きてきた。こうした状況が、『ある女の一生』ではなく、より普遍的な意味合いを強めた『女の一生』という訳題に反映されているのかもしない。要するに、多かれ少なかれ、女性の人生はこのようなものだというニュアンスがここで生まれたのである。その後、フランス語から直接訳されるようになり、杉捷夫訳（岩波文庫所収）、新庄嘉章訳（新潮文庫所収）が生まれたが、『女の一生』という訳題はそのまま踏襲された。かくいう私も拙訳が光文社古典新訳文庫から刊行されるにあたり、さんざん迷った。いっぽう、原題により近い『ある人生』に変えてしまおうかとも思ったが、あまりにも有名な題ゆえに、読者を混乱さ

せてもいけないという編集部の意向もあって、このタイトルを引き続き用いることになったのである。

さて、ここまで、フランス語→英語→日本語という翻訳の過程で微妙にニュアンスが変化していくタイトルについて述べてきたが、モーパッサンの生きた一九世紀から、日本語訳の刊行された大正時代、そして山本有三、森本薰の作品が発表された昭和と、時代の変化もまた、『女の一生』に変化をもたらさせた。

奔放な女性像を描いた有島武郎の『或る女』は広津訳『女の一生』の六年後、一九一九年に刊行された。与謝野晶子や平塚らいてうの参加した『青踏』が一九一一年発刊であることを考えても、日本語訳『女の一生』が刊行された大正時代はまさに、受け身の女性像から自立した女性像への転換期だったのだろう。

山本有三の小説『女の一生』は一九三二年の作品、森本薰の戯曲『女の一生』は一九四五年の作品である。女医である御木允子も、貿易商として奮闘する布引けいも、モーパッサンの描いたジャンヌに比べれば実に意志的な女性であり、仕事をもつことによって社会性ももちあわせている。娘、妻、母として分断されて生きるのではなく、自我をもつて「ひとつの人生」を生き抜く新たな女性像が誕生した。こうして、女性の一代記が小説としての面白みをもち、作家の心を、そして大衆の心をもつかむようになったのではないだろうか。つまり、『女の一生』は人間の弱さを描く小説から、女性の強さを描く小説へと進化していくの

だ。「大地を強く踏みしめて」歩む允子、「誰が選んでくれたでもない、自分で選んだ道ですもの」と言う布引けい。いずれも、遙しく現代的な女性像だ。

さらに時は過ぎ、一九八二年、遠藤周作が江戸時代末期と第二次世界大戦を舞台にキリスト教信者の女性を描いた『女の一生』を発表した。だが、国が変わり、時代が変わり、女性の生き方が多様化しても、そこに共通するのは、一人の人間の人生に密着することで、普遍的な感情を出し、人生とは何か、人間の幸福とは何かを問いかける作家のまなざしである。モーパッサンも山本有三もその点は同じなのだ。



### 永田 千奈（ながちな）

一九六七年東京生まれ。早稲田大学第一文学部フランス文学専修卒。翻訳家。主な訳書に『ある父親』ラカル（晶文社）、『それでも私は腐敗と戦う』ベタンクール（草思社）、『サーカスの犬』ルーボティ（光文社）、『海に住む少女』シユペルヴィエル（光文社）、『女の一生』モーパッサン（光文社）などがある。



『女の一生』  
モーパッサン著／永田千奈訳  
光文社古典新訳文庫 2011年



## 山本有三記念館ボランティアリポート⑤

記念館で活動中のガイドボランティアより  
交代でリポートをお届します

### 「再建への要」とは

戦後の復興時代、有三は自ら参議院議員となり、「国家再建の原動力は人間である」という信念の下、人を作るために教育予算の大幅な増額を要求するなど、多岐にわたり尽力しました。まさに、名作『米百俵』に描いた思想を、身を挺して具現化したのだと、このたび気付きました。

おりしも、東日本大震災の復興及び原発事故に際し、大人本位の緊急問題にのみ追われがちです。

子ども達を放射能汚染から守り、健全に育成するために、今こそ有三の主張した原点に立ちたいと思います。

(藤田正子)

### 広がる「好奇心」

3年余りのガイドを経て、暮らしの中に様々な楽しみを見つけるようになった。

ある現代作家が三鷹住まいだったのを知り、食わず嫌いだった作品を読む。登場する図書館の描写に、これは有三記念館の佇まいをイメージしたのかも!?などと勝手に想像する。また愛犬を囲む有三一家の写真を見て、文豪たちのペットは犬派、猫派などと追ってみたり、私の好奇心が広がっていく。遊戯三昧。ガイドに関わって得た恩恵の一つだ。

自分の引き出しが熟成し、いい塩梅で来館者にお話できたらと思う。

(安田光子)

## 朗読会コンサートを開催しました♪

今年の朗読コンサートは、朗読の野田香苗さんとヘルマンハープ奏者の林智子さんをお迎えし、6月4日に開催しました。昭和20年代に書かれた隨筆を中心には有三作品4編と、「浜辺の歌」や「トロイメライ」などの名曲をお届けしました。「母の思い出」朗読中には、有三の意外な姿に笑い声が起ったり、楽器紹介のコーナーでは観客全員で弾き真似をしてみたりと、楽しいコンサートとなりました。



朗読の野田香苗さん(右)とヘルマンハープ奏者の林智子さん(左)。ヘルマンハープは、専用の楽譜を弦の下に入れ、音符代わりの印に沿って弦を弾き演奏します。年齢や音楽経験の有無に関係なく演奏できることから、「音楽のバリアフリー」を目指した楽器として注目されつつあります。

### 編集・発行

## 三鷹市山本有三記念館

Mitaka City Yuzo Yamamoto Memorial Museum

〒181-0013 東京都三鷹市下連雀2-12-27

TEL0422-42-6233 FAX0422-41-9827

ホームページ <http://mitaka.jpn.org/yuzo/>

開館時間：午前9時30分～午後5時

休館日：月曜日・年末年始（12月29日～1月4日）

※月曜が休日の場合は開館し、翌日と翌々日を休館。

入館料：一般300円（20名以上の団体200円）

※中学生以下、障害者手帳持参の方とその介助者、  
校外学習の高校生以下と引率教諭は無料。

アクセス：JR中央線三鷹駅より徒歩12分

JR中央線・京王井の頭線吉祥寺駅より徒歩20分

### ◆山本有三の作品案内

## 『女の一生』 三鷹市山本有三記念館文庫 2011年

企画展の開催にあわせ、山本有三著『女の一生』を文庫本（上下巻）として復刊しました。現在、三鷹市山本有三記念館文庫をご購入いただいた方に、オリジナルブックカバーをプレゼントしています。当館及び財団ホームページの通販ストア(<http://mitaka.jpn.org/store>)にて10月1日より販売いたしますので、昨年復刊した『波』

（三鷹市山本有三記念館文庫 2010年）と合わせて、この機会にぜひご覧ください。



山本有三著『女の一生』  
(三鷹市山本有三記念館  
2011年)

## 『心に太陽を持て』 新潮文庫 1981年

「勇気を失うな。くちびるに歌を持つ。心に太陽を持つ。」という一節で知られる山本有三の「心に太陽を持つ」が、NHKの連続テレビ小説「おひさま」で取り上げられたこともあり、今話題となっています。

本書の初版は昭和10年ですが、戦後も度々復刊されたことから、多くの人々に影響を与えてきました。戦争が迫る時代の子どもたちに強く生きよと呼びかけた有三の言葉が、東日本大震災の復興途中にいる私達の胸にも強く響きます。



山本有三著『心に太陽を持て』(新潮社 1981年)